



宮澤賢治が新造した青黝の意味

宮澤賢治の色彩語で圧倒的に多いのは、青色である。青を用いた色名には多様性も見られる。例えば、「青黒」に近い色名として「蒼黒」や「青ぐろ」、「蒼ぐろ」の他に、「青黝（あおぐろ）」や「蒼黝」、「蒼黝ぐろ」、「蒼黝む」という賢治が新造した色彩語も用いている。

青黝の「黝」は、この一語でも「あおぐろ」と読み、青みを帯びた黒色の「青黒」を意味する。賢治は青黝を、白い雲や、熱で痛む頭の奥の斜面、太陽が落ちたときの空の淵、日が沈んだときの草を形容するために用いている。蒼黝は、深き空や、北極に向っているとときの海か陸、北極圏の冷たそうな海、しーんとした空間を形容するために用いている。

初期短篇の「柳沢」では、「空の鋼は綺麗に拭（ぬぐ）はれ気圏（きけん）の淵は青黝ぐると澄み渡り一つの微塵も置いてない」（『新校本宮澤賢治全集』第12巻、童話・劇・その他本文篇、255頁）と描写されている。

「山地の稜（りょう）」では、「もしこれがしんとした蒼黝い空間でならば全くどんなにいいだらう」（op. cit., 279頁）と表現されている。

色名の青黝や蒼黝には、賢治の独創性への意欲が反映している。 (吉村耕治)

源氏物語の色 -47 「橋姫」

「宇治十帖」と呼ばれる物語の始まりの帖で、書き出しは「世間から忘れられた古宮がおられた」という一文。光源氏の異母弟である老いた八の宮のことで、娘二人（大君と中の君）がいるが、夫人は中の君を出産した後亡くなり、宮は大変嘆き悲しまれた。

京の邸は広くみごとで、池や築山の形だけは昔と変わらないが、大変荒れて、草が青々と茂り、軒の忍ぶ草が、わが物顔に青みわたっている。四季折々の花や紅葉の、色も香をも、以前は同じ気持ちで夫人とながめることで心の慰めになったが、そうした自然の色もただ、寂しく親しめない様に感じるとある。

忍ぶ草とは、シダ類ウラボシ科の多年草、ノキシノブのことで、他の帖でも荒廃の表彰としての記述がみられる。物語の展開においてはそれほど重要とはいえないこの場面だが、人の心の動きというものは千年ほど前も今と変わらないと改めて感じ興味深い。

後にこの邸を焼亡し、八の宮は宇治に退き、二人の姫君を男手一つで養いながら、自らは仏道修行にいそしむ身となっていく。その宇治の八の宮の元へ主人公・薫が通うようになり、自らの出生の秘密を知る物語へとつながっていく。 (平山和香子)

●大辞泉ひろいよみ 38 一お

おしろい：白粉。お白い、の意。元来は女性語。顔や首筋につけて肌を色白に美しく見せるための化粧品。粉おしろい、水白粉、練りおしろいなどがある。

おしろい花：オシロイバナ科の多年草。江戸時代、種子の白い粉をおしろいの代用にした。

落（ち）葉色：枯れた落ち葉の色。茶色に黄赤を帯びた色。

おどし（威）：鎧の札（さね）を革や糸で結び合わせること、また、その革や糸。

御納戸色：納戸色に同じ。

おはぐろ：御歯黒・鉄漿。歯を黒く染めること。かねつけ。歯を黒く染めるのに用いる液。古い鉄くずを茶の汁または酢に浸して作る。筆にこの液を含ませ、五倍子（ふし）の粉をつけて歯に塗る。

織色：染めた糸で織った織物の色。縦糸と横糸とで、色を変えて織った色合い。緯白（ぬきじろ）、麴塵（きくじん）などの類。

織勾配：縦横両方に太さの異なる二種以上の糸を用いた織物。紅梅織り。縦糸に紫、横糸に紅色を用いた織物。

織り込む：地色と違う色の糸や。模様を入れて織る。一つの物事の中に、他の物事を含みこませる。 (永田泰弘)